

自己点検・評価について

令和7年3月7日実施

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

学部長会議

(責任者名) 北島 己佐吉

(役職名) 学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	プログラムを管理する教務部では、対象科目の受講者数、単位の修得状況等を把握しており、状況に応じて開講クラス数の調整等を行い希望する学生が受講できるよう対応している。 教員は、K'sLife(学生、教職員が利用する教育プラットフォーム)を使って学生の出席状況の確認やレポート課題の配信及び提出状況を把握できるようになっており、学修の進捗状況をリアルタイムで把握できる。 令和6年度は、対象科目の受講者総数(延べ数)が4,947名、単位修得率が84.8%となった。 また、プログラムの必修科目である「AI導入」、「データリテラシー」は、受講者数1,175名、単位修得率84.6%である。
学修成果	学修成果を把握するため、このプログラム全体の進捗管理を行っている教務部において、開講クラス数や対象科目の履修者数などの状況、単位修得状況等の数値データと、大学評価室が実施する授業評価アンケートの結果と併せて分析を行っている。 教務部は、客観的なデータである学部、学年別の受講状況や単位修得状況に加え、授業評価アンケートの中から、受講の動機、授業の内容に関する事項等で授業に対するモチベーションや満足度、学修成果に関する事項でどのような成果が得られたかを分析し、併せて自由記述欄の記載事項をまとめる。 その結果については、学部長会議で共有し、本プログラムの評価・改善に活用している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	令和6年度は、対象科目の単位修得率が84.8%となった。 授業評価アンケートの結果では、授業の難易度について、「難しい」、「やや難しい」という割合が40.9%となっているものの、「あなたは、この授業の到達目標を達成しましたか」という設問に対し、58.0%が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している。 また、「この授業に意欲的に取り組みましたか」という質問に対しては、64.6%が「とてもそう思う」、「そう思う」と回答している。 教員の説明や、資料についても「解りやすかった」という自由記述の意見が多数あった。 以上の授業評価アンケートの結果、単位修得の状況から、受講生は意欲的に取組み、概ね授業内容を把握し、高い理解度を獲得することができている。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	授業評価アンケートの結果では、「あなたは、総合的に見てこの授業を履修して良かったと思いますか」という設問に69.7%が「そう思う」、「とてもそう思う」と回答している。 自由記述欄でも、「非常に興味を持てた」、「今後、ビジネスの場等で必要になるであろうデータサイエンスやAIの知識をつけることができた」、「先生が丁寧に教えてくれた」、「分からない箇所があれば教えてくれる環境があった」等の記述があり、今年度受講した学生が、次年度以降に後輩や、同学年の学生に推奨する状況はできている。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	「AI・データサイエンス副専攻」は、令和4年度から開始した全学部対象のプログラムである。「AI導入」、「データサイエンス」については、修了するための必修科目として位置づけており、入口となる科目の受講を促進するため、入学後の各種ガイダンスにおいて、副専攻についての説明を行うとともに、積極的な履修を呼びかけた。また、受講生の増加に対応できるよう、開講クラス数を増加した。 令和5年8月に文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」の認定を受けた以降は、学内に「リテラシーレベル」の認定を受けたことの提示やサイネージでの案内を継続し、令和7年度の進級時のガイダンスにおいても改めて履修の呼びかけを行うなど、履修者数・履修率を向上する取組みを行っている。 令和6年前学期には、2名の学生が「AI・データサイエンス副専攻」を修了した。2名の修了者には修了証を授与し、受講学生の声として活用するためにインタビューを行い、大学のHPIにおいて記事を掲載した。今後も、本プログラムを周知している大学のHPIにおいて、受講学生の声を紹介し、より一層の興味・関心を持ってもらえるよう広報を行う。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和6年前学期に2名の学生が修了した。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では、自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育の質の向上を図ることを目的として「外部評価委員会」を設置し、令和6年度は、経済・産業界関係:2名、教育関係:2名、地域関係:2名の計6名に委員に就任していただいている。 外部評価委員会は産業界・自治体等を含め、様々な視点からの意見聴取が可能であるため、本委員会において、その他の自己点検・評価の項目に加え、本教育プログラムについても意見聴取を行い、『KSU基盤教育』、『専門教育』、『KSU プロジェクト型教育』の教育課程が体系化されているとともに、内容も時代ニーズ等を踏まえながら、『AI・データサイエンス副専攻』を設けるなど、適宜、内容の見直しや改善がなされており、効果的な教育課程、内容となっている」との意見をいただいた。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	「AI」や「データサイエンス」を学ぶ上で「数理」は重要な要素であるが、導入段階においては、人による手作業がどのようにAIに代替されるようになってきたか、どのような技術があるのかといった基礎的な部分から始め、AIが社会に与える影響について学ぶ。また、数理的な分析を行う前提となるデータの読み方や考え方などの基本的事項について学ぶ講義内容としており、講義の中では、身近な事例を取り上げて解説を行い、興味・関心を喚起するとともに、今後の社会において必要になる知識であることを認識させて、受講の意義付けを行うよう工夫している。 併せて、修了証の授与や副専攻を修了することのメリット等についても周知しており、積極的な受講の動機付けを行っている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	本学で実施する「AI・データサイエンス副専攻」は、全学共通で実施するKSU基盤教育で導入部分を学び、各学部で開講する関連科目を受講することができる。これは、数理などの専門的な分析に偏ることなく、自身の興味関心のある分野を中心に幅広い知識を得て、理解できる範囲を広げていくことや、自身のレベルに合わせて科目を選択できるようにするための工夫である。 また、副専攻を修了するためには、必ず他学部他学科の授業を受講し単位を修得する必要がある。これによりAIやデータが、分野や状況によって、利活用やアプローチの手法が異なることを学生に理解してもらい、学ぶ楽しさを体感できるようにしている。